

## 「聖霊の働き」

使徒言行録 2:1-13

今日は、ペンテコステ「聖霊降臨日」です。この「ペンテコステ」は、ギリシャ語の「第 50」という意味の言葉で、ユダヤでは「五旬祭」と呼ばれる祭り日でした。この日は、出エジプトを記念する「過ぎ越しの祭り」から数えて 50 日目にあたるところから、このように呼ばれるようになったわけですが、元々は、小麦の収穫を祝う「刈り入れの祭り」とか「七週の祭り」と呼ばれていた日でした。それが後のユダヤ教において、モーセを通して「十戒」を与えられた記念日として、祝われるようになったのです。

主イエスの弟子たちにとって、この日は、イエスさまが十字架の上で亡くなられて 3 日目に甦られてから、ちょうど 50 日目にあたる日でもありました。イエスさまは復活されてから、40 日間、弟子たちに会われ、彼らを慰め励まし、40 日目に天に昇られ、父なる神の御許に戻られたのですが、その 10 日後に、弟子たちに聖霊が降ったのです。

つまり、弟子たちは、イエスさまが天に昇られてから 10 日間、エルサレムに留まり、みんなで心を合わせて熱心に祈って、上からの聖霊が与えられるこの日を待っていたのです。聖霊は、主の名によって共に集まり、祈りつつ待つところに与えられる神の力です。今日の使徒言行録 2 章 1 節以下には、この日、弟子たちに聖霊が降った様子が、次のように記されています。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」

「激しい風の音」、「炎のような舌」、そして弟子たちが語りだした「ほかの国々の言葉」、これはどれも、私たちが日常生活の中で体験することのないような不思議な現象です。現代の私たちには、この不思議な現象そのものについて、解明することは出来ません。またその必要もないことだと思います。

「聖霊」は、「神の霊」、見えざる神の息、神さまのご自身の働きです。それは、まさに「風」のように、私たちの思いを超えて、どこから来てどこへ行くのか、私たちには分からないのです。ただ、はっきり言えることは、この時、弟子たちの冷え切っていた心が、炎のように熱く燃やされ、今まで人を恐れて家に閉じこもっていた彼らが、大胆に大勢の人々の前で、語りだしたということです。しかもその彼らの言葉は、諸外国から集まってきていた人々に通じる「ほかの国々の言葉」であったということです。「風」と「炎」と「舌」は、その時弟子たちが受けた衝撃の大きさと、熱い心の感動を表現した「心象」ではないか、と思われまます。

いずれにしても、「聖霊」は、見えない神の力であり、主なる神が生きて働いておられるという確かなしるしなのです。弟子たちは、この聖霊によって、新たな力に満たされ、語るべき言葉を与えられて、大胆に、力強く語り出したのです。

先週学んだ 1 章 8 節で、主イエスは天に昇られる時、弟子たちにこう言われました。「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そして、エルサレムばかりで

なく、ユダヤとサマリヤの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と。この主イエスの予言が、まさにここに実現したのです。

これまで、人前で自分の思っていることを十分に語れず、主イエスについてさえ「その人を知らない」と自分の信仰的立場をあいまいにしてしまうような弟子たちでしたが、ここで彼らは、まるで別人のように、多くの人たちに「神の偉大な業」について語り、人々に驚きと感銘を与えたのです。

このペンテコステの出来事は、何よりも、弟子たちに「イエスこそ主である」という信仰の確信を与え、そのことをみんなの前で公然と語る、そのような力が与えられたということです。その意味で、「聖霊」は何よりもまず「言葉の奇跡」を生んだということが出来ます。

しかし、その「言葉の奇跡」は、単に弟子たちに語る勇氣と力を与えた、というだけではありませんでした。彼らの語った言葉は、祭りでそこに集まっていた「ほかの国々」の人々にも通じ、かれらが、皆、自分たちの生まれ故郷の言葉で聞いた、というのです。弟子たちはほとんど皆、ユダヤのガリラヤ地方の出身で、ガリラヤなまりのアラム語しか話せなかったと思います。特別に外国語を習ったわけでもなかったと思います。そして、この場に集まっていた人々は、ユダヤ人の他に、9節以下に記されているように、「パルティア、メディア、エラム、メソポタミア、…ローマ」など16の地名や地域の名前が記されています。これらの外国人は、この祭りのために世界中から集まってきた人々です。おそらく彼らは「ディアスポラ」(散らされた民)と言って、昔、戦乱や迫害、捕囚などによって海外に散らされ外国で生活するようになったユダヤ人の子孫で、それぞれの外国の言葉を母国語としていた人たちと思われます。その彼らが、「めいめいの生まれた故郷の言葉を聞いた」と言って驚いたのです。

外国に行くと、言葉が通じないことほど、不便で不都合なことはありません。時には言葉が通じないために孤独に陥り、鬱になってしまうこともあるようです。日本に来ている外国人も、ずいぶん不自由な思いをしていることだと思います。

その海外から来ている人たちが、ここで、思いがけずに弟子たちの口を通して、懐かしい母国語で、「神の偉大な業」を聞いたというのですから、どんなに驚き喜んだか分かりません。まさに「言葉の奇跡」というほかありません。

旧約聖書の創世記によると、もともと人類は、神さまによって、同じ言葉で話し合い、互いに言葉が通じ合うものとして造られていた、ということです。創世記11章には、有名な「バベルの塔の物語」が記されています。それによると、東の地からその地に移って来た人たちが、レンガを作ることを覚え、それをを用いて、天にまで届く塔を建てて、それによって自分たちが一つになって、自分たちの名が永遠に残るようにしようと、巨大な建造物を作り始めたのです。それをご覧になった神は、「皆が一つの言葉を話しているから、自ら神にまで近づこうという、高ぶった思いを抱くのだ」と怒り、彼らの言葉を混乱させて、互いに言葉を通じないようにされたというのです。その結果、彼らは、共同してその巨大な塔を完成させることが出来ず、皆バラバラに各地に散らばり、それぞれ違った言葉を語るようになった、というのです。

この「バベルの塔」の物語は、多分、どうして人間の言葉は、国によって、地方によ

って、こうも違うのか？ 同じ人間同士なのに、どうしてこうも言葉が通じ合わないのか？ 私たちも、そう思います。前の教会で、よくアジア学院の留学生を迎えて、交流の時を持つのですが、アジアやアフリカの各地から来た留学生を迎えて、もっと親しく色々なことを話したいし、聞きたいと思っても、話が通じないもどかしさをいつも痛感しました。また、私の下の子は、ニュージーランドで生活していますが、連れ合いはオランダ人です。そのため子供たちは、友達とは英語で話し合いますが、母親とは日本語で話し、父親とはオランダ語で会話するよう躰けられています。子供たちは3か国語をうまく使い分けていますが、大変なことだと思います。

どうして、国によって、こんなにも言葉が違うのか？ そのような疑問から、その原因を探ると、「バベルの塔」の物語が生まれたものだとされます。同じ一つの言葉を語ることによって犯した人間の傲慢の罪が、互いの言葉が通じ合わなくなった原因で、神の裁きによるものだ、と。

この物語との関係で、このペンテコステの日が起こった出来事を解釈すると、神さまは、御子イエス・キリストの十字架の死と復活を通して、人間の罪を赦しておられる。そして、国や民族の違い、言語や文化の違いを越えて、すべての民が、互いに心を通わせ、一つになることが神の御心だということではないでしょうか。弟子たちの語った言葉が、世界の各地から集まった人々に通じ、それを理解し、共に神の御業を讃えることが出来たということは、来るべき「神の国のしるし」であった、と言うことが出来るのではないのでしょうか。

神さまの御心は、世界中の人々が、言語や国籍・民族の違いを越えて、一つになって、共に謙虚に、主なる神に仕え、神の国を実現することなのです。「聖霊」は、その目的のために働く「神の力」だと言うことが出来ます。

今、世界は分断と争いに満ちた緊張の中にあります。それぞれの国や無民族が、自国の利益と繁栄のみを求め、他者や他国を敵視しているからです。イスラエルとガザ等パレスチナ自治区との武力による紛争は、やっと休戦になったものの、長引く中東の戦闘は、和解のめどがつかえません。アメリカと中国の緊張はますます深刻化し先行きが不安です。日本をはじめ、アジアの諸国もその対立構造の中に組み込まれ、いつ戦争に巻き込まれるか分からない状況です。同じ言語を使っている、韓国と北朝鮮、台湾と中国の間では、お互いの言葉が通じ合わず、むしろ、同じ言語で、誹謗・中傷し合う関係が続いております。ミャンマーでは同じ国の中で、軍隊が国民に銃を向けるという悲しい事態が生じています。日本の国内においても、アジアの人々など外国人に対する差別や排除しようとする排外感情が高まっています。最近、入管の施設に収容中のスリランカの女性の非人道的な扱いによる死が問題となり、外国人労働者たちに対する日本政府の対応や入管法が国の内外から非難を浴びています。

今、世界中に蔓延しているコロナ禍の中で、世界中のみんなが助け合って乗り越えていかなければならない事態の中で、どうしてこうも、お互いの意思が通じ合わず、国籍や文化の違い、肌の色などによって、憎み合い、争い合い、殺し合わなければならないのか、ほんとうに、悲しい思いがいたします。どうしたら、国籍や言葉や文化の違いを越えて、一人一人の人間の命が尊ばれ、互いに助け合って、共に生きる平和な世を築

くことが出来るのか？ そのことが、問われているように思います。

そのためには、まず、お互いに「通じ合う言葉」を語り合うことから始めなければならないのではないか、と思います。通じ合う言葉とは、自分のことだけを主張する自己主張の言葉ではなく、愛と誠意を伴った真実な言葉をもって、互いに仕え合うことではないか、と思います。力や武力による威嚇、経済制裁といった圧力によって、平和は実現しません。愛と真実を伴った通じる言葉をもって、忍耐強く対話の努力を積み重ねる以外にないように思います。これは、私たちの家庭や、友人、すべての人間関係についても言い得ることです。私たちは小さく無力なものですが、聖霊の導きを祈りつつ、相手に伝わり、相手を生かす言葉を語り続けたいものだと思います。この聖霊降臨日は教会の誕生日でもあります。教会からの主にある交わりから、心の通い合う言葉を生み出していきたいと願います。